

おはん
長右衛門

桂川連理冊

一〇

若・有・候

〔解題〕 安永五年十月十五日より北堀江座上場。作者菅尊助。

お半長右衛門の實説は明かでない。即ちお半と長右衛門とは密通してお半が懷妊したので、一時丹波の親類に預けようとして行く途上で賊のために殺されて桂川に投げられたのであるとも、又桂川附近なるお半の乳母に絞殺されたのだとも、或は又大阪の商人長右衛門に連れられて奉公のために大阪へ下る船の中で殺されたのだともいふ。

初めてこれを劇に仕組んだのは。寶曆十一年五月十八日から曾根崎の豊竹座上場の「曾根崎模様」であるらし

い。此の曲ではおはつ徳兵衛の曾根崎心中にお半長右衛門の桂川心中が取合せて脚色されてゐる。次に宮蘭節の「隴の桂川」(同曲参照)があつて、これは明和初年迄の作曲と思はれる。而して歌舞伎では明和六年九月大阪山下八百藏座で「桂川仇白浪」を、又安永元年五月大阪の中座では「桂川連理柵」の外題で演じられてゐる。本曲は是等の諸曲に基づいて作られたものと思ふ。上の巻は、道行戀の乗かけ、石部宿屋の段、信濃屋の段、

下の巻は六角堂の段、帯屋の段より成る。

江戸の豊後三流に於てもお半長右衛門の桂川心中道行はとりぐに名高いものとして残つて居るが、いづれも本曲より派生して改作せられたのである。

馬柳の馬場を。押小路。フシ軒を並べつと言はしやれぬかいの。イエノ、遠最辰口。地聞きかねて隠居塚齋。數珠し。呉服店。現金商ひかけ硯。虎石町州の殿様から請取りの脇差。研屋からつまぐつて奥より出で。調ア、お婆間の西側に主は帯屋長右衛門。井筒に帶來とその儘。藏屋敷へ持つて參られきづらい。死なれた隣の治兵衛殿が。の緩簾をかけ値如才もないぎのお絹。ました。サイノ。脇差の研が出来まし五つになる迄育てられた長右衛門。無氣の取り苦しい姑に目を貫はじと襷が。たと持つて行くばかりに。かう隙が入理に貰うて家の根柢。死んだ先の女房け。洗濯物を引きのしの地氈は寄つてつて内の見まはしが出来るものかいは。隣への義理があると。荒い詞も遣はも岩乗づくり。母のおとせは勝手を出の。ア、同じ事でも弟の義兵衛めは。なんだに。長右衛門成人以後。後妻にで。調飯の箸下におくと駈出した長モ痒い所へ手の行く様に精出しをる直つた身を以て。連れ子の義兵衛はか右衛門もう晝過ぎたに戻らぬは。又川に。エ兄のぬるまに困つたと。地糞子りを大事にかけ。兄が事といふとがみ東で吞居ゑて居るのである。お絹。ちを憎み質の子を。持てはやしフシたるく。エ、ちと嗜みやれ。ヤコレ嫁女。

氣にかけてたもんだと。地女房にかはる佛性。調オ、その結構を見込んでの。身代をさうほうさにする長右衛門。随分と可愛がらしやれ。ア、やかましやのやかましやの。コレお絹隠居へ連れて往て。晝寝などさしてたもれと。

地負けて居ぬ口逆らふは。後世の邪魔と繁齋は。裏の隠居へ嫁引連れ。行く。戻ると。一時に。義兵衛はとつかは。フシ内に入り。調母者人間かしやれ。一昨日兄貴が取りに行かれた駿河の爲替。まだ金を見ぬ故。合點が行かぬと飛脚屋へ往て問うたれば。一昨日長右衛門殿に渡したと。爲替手形を出して見せた。すりや爲替の百兩は。兄貴が宙でくすねたに極まつた。オ、さうであろとも。戻りをつたら吟味して親父殿への面當。ぐつといがめてよい楽しみ。イヤコレ義兵衛。今一つよい

事はなう。昨日登つた預松の五十兩も。金戸棚の合鍵して。コレ見や。ちよろ盗んで置いたは金の入るわが身にやし。ホッしをく歸る我が家の内。



行 道「門 衛 右 長 半 和」

りたさ。爲替の金をくすねたからは。是も兄めに塗付ける。ヤ出来た。か十丁ある屋敷に。半日の上かゝつて母者人コレこの五十兩はの。コレ斯う内の事は何になる。朝から藝子やお山

狂ひも餘り長でござらうと。約束で先へ手形はやるまいがの。兄の。コレ隣の娘お半との。兄貴が懸は隠居の耳へ筒抜け。又鬼婆がしやら貴。イヤ先へ手形はやるまいがの。アろして居ると近所から言立つれど。ア聲は。長右衛門が戻つたかと。お絹をアコレ／＼義兵衛。義兵衛。詮議にやアいとしなげに兄貴に限つて。猥など連れて親繁齋。同さつきにも言うて聞及ばぬ。もう川東へ飛んだぢやある。言はうか。マ大人げないそんなこと。かすに長右衛門さへ見りや嘴付く様昨日のぼつた五十兩も心許ない。サアよもやあるまいとおもうたが。へ、に。近所の手前もちと思やれ。長右衛門へ出して見せい。地あつと言ふよりへ違ひないて。コ、コレ此の状で。門もひだるかる。ソレお絹早う飯をお長右衛門。巾着の鑰こて／＼と金戸棚ア、それは。オットどつこいエヘンそましや。イヤ飯どころぢやないぞ。問の引出し明け。同ヤア五十兩の金が出来から御覽じアハ、ハ、ハ。サア／＼はにやならぬ事がある。コリヤ長右衛門。一昨日取りに往た爲替の百兩。ドリ繁齋も共にフシ驚く呆れ顔。同オ、／＼／＼エヘン。エ何ぢや書きをつたレ金見よう爰へ出せと。地言はれて吐盗人たけ／＼しい。錠の下りた此の戸な。マ、マ、口の間は取つて退けてと。胸の長右衛門。同イヤ折角参つたれど。棚。鑰持つた者が出さいで誰が取るエ爰あたりから讀みかけうか。エ先の亭主が折ふし留守。金は明日受取る約束。ア、コレ／＼コレ兄貴。エ、ぢやない。オ、天晴れな家の根柢。オの宿の假枕と。今しも忘れ兼ねる。ぬけ／＼ぬけ／＼嘘を言はしやんない。オ根柢ぢや／＼／＼ヤ、コリヤお根柢ませたり／＼小へげたれめがアハ、ハ、ハ。エ、どうぞ／＼今一度。嬉しきなう。おりやたつた今先へ往たれば。様ぢやわいなうオホ、ハ、ハ。親父殿安ハ、ハ、ハ。御見を願ひ上げ／＼。長様まゐるお半金はこなたに渡したと。爲替手形を出堵である。嫁御さぞ嬉しかるなう。イ御見を願ひ上げ／＼。長様まゐるお半して見せた。ガそれでもこなた請取らヤコレ母者人。そればかりぢやない。より。長様まゐるお半より。ヤア／＼ぬか。エサアそれは。アノ金は明日のまだ／＼／＼ど減相な事があるわそりや大それた不義徒ら。兄妹同然と

サア誰ぢや。鎧を持つてけつかつて居カリ腹立つまゝの捨て詞。眞面目になつた。イ、ヤ弟が打つのぢやないぞ。て。盗人は外にある。ム、盗人は外に有つた母息子。長右衛門は女房を引退おれが名代にどづかして金の白狀名代ととはヤ、何か。コリヤアノ白川様から釣取る様な義兵衛や。如來様見る様どうにもそれでもお前。エ、言ひやまぬか。サア。何言はしやんす。禮儀もな此の母に。塗付けうと思ふのか。乞食こじき人によるわいな。何ぼ結構にあしらうのぢやら。盗人の子やら。知れぬ捨子の汝とは違ふ。素性正しいこちら親子に。科を着せうとする横道者めが。サアエわしや腹が立つ。腹が立つと。埃身かみを震はしたる。フシ無念泣き。心根百五十兩が千兩でも。我が物を我が遣言はぬと斯うぢやと標欄等。堀振上げはうが。又まき散らさうが心次第。そりや餘りと駈寄るお絹。箒をしつかりと動かせず。お前はなア。何とした。何としたとは。エ、胴慾どうよくき。調オ、それ。親ぢやぞ。親ち履直さし。親子共にぶちのめさせて賣ぢやわいな。いかに腹分はらかぬとやぞ。親に向つて何を不足コリヤ義兵衛。ちつと代つて箒の役。叩きのめし情に女夫は有難涙。親子はふくれる。いな。言はぬが禮儀孝行なれとお前方の氏素性もあんまり綾は抜けぬぞえ。上ぐる手をぐつと捻上げ。調ヤわれに臺所で一杯せうかい。オ、それがよこサア言ひませうか。言はうかと。はよう叩かれまい。見事兄をわりや打んしよ。コリヤ長吉め。失せあがれ。

おのれにや大分臺詞があると。弱身じやくしんの持合ひで燈ともつてある。油は繁齋燈心はんさいとうしん姑御こごや小舅こきうにつらい氣兼ね辛抱も。おを見せぬ親と子が。跡に引添ひ出来合できあひは長右衛門。暗いと言うては播はき立て。ひの壺つぼをかぶつた色事師いろしオクリ打連れうちづれ勝手かたてへ入る跡は。早や暮れかゝれば立てゝ。もがきあせつて燈心とうしんがなう下男しもな。燈ともす八方行燈はつぱうぎやうとうの灯ひ。佛壇ぶつだんの御明ごめいしは年寄役としよりやくと繁齋はんさいが。オクリこてゝ燈とうの氣の細い燈心とうしん一本。コレ高が町人のせどッし濕り居る。女夫にょふの者を膝近く。一年々いちねんねん尻しりが温ぬくり。道も義理も知らぬ婆ばめ。追ひまくるも合點なれど。七十に近い繁齋はんさい、女房の離別りべつがみめでもない。モ堪忍かんにんの胸をさすつて居る。したが厭いとと言はうが應おうといはうが。近い内隠居うちかくしへ呼び取り母屋もやの事は構かまはすまい。女夫にょふながらそれを樂よろこしみに。煩わづはぬ様にしてたも。又長右衛門も何やかや氣のもめる事もあらうが。浮世に長うも居ぬおれに逆様な事やなど必ず見せてたもんなや。物の聲こゑはアレたアノ御明ごめいし。わづか燈心一筋でも。油となど。怪我けがにも出して下さんすなえ。姑御こごや小舅こきうにつらい氣兼ね辛抱も。お前といふ人あればこそ。十年連添とせんとぞふ女房の手前。立たぬ事も何にもいらぬ。をやま狂ひも藝子遊びもそりや殿達とんだの器量きりやうといふもの。お半女郎はんぢやうと二人が中。ひよつと私が知つたかと。言譯ごんぎやくにさしやんす嫁よめ。愚鈍ぐどんな者でも女房ぢやと思つての心遣ひと。わたしや心で拜かんでばつかり居りました。返報へんぱうではなけれども。縁組えんぐみを變改へんかいは。年端しげも行かぬあの子でも若しやお前の樂よろこしみに。なりもせうかと心の奉公。調しらわしや疾はやうから知つては居れど。惱なや氣きどころか顔へも出さぬは。氣の毒がらすが笑止しょうしなと結構な舅御きうごや。意地くね悪い姑御こごの。耳へ入ろかとそれが悲しさ。私も女子こしよの端はなぢやもの。大事の男を人の花。腹はらも立つし。愀氣せうきの仕様しやうがも。まんざら知らぬでなければども可愛。

嬉しき過分さ。地 千萬年も連添うて禮が身は何たる大悪人。モ、、愛想もこくく。見る目も明かれぬ雨やさめ。言ひたい堪能させたい。取分けて五つからお世話なされた親父様。末期の水も上げませす。逆様事の敷きをかけるは。不孝といはうか道知らず。調さつきは。御意見お絹が心底。聞けば骨身も裂かるゝ苦しみ親父様の御了簡お絹が心はさばけても。捌けぬものはお半が腹帶。死なしやつた治兵衛殿。お石殿へは恩を仇。その上屋敷へ持つて往た。政宗の差添は。マアいつ摺換へられたも知れぬ贋物最良づよいお留守居もお國へ取りなす詞がない今夜四ツ迄に詮議し出せと。モ御了簡は付いたれど。地 どこを詮議も雲を闇。所詮生きては言譯立たず。モ死なうと覺悟極めたれども。調親父様やお絹が顔。名残に一日と見に戻り。いよゝ女房に苦に苦をかけ。不孝に不孝の覆輪かける。此う見せて下さんせと。地 抱起して顔つ

くく。見る目も明かれぬ雨やさめ。長右衛門も此世の別れと。口へ出さねど心の内。暇乞ひぞと抱きしめ。調コレ何にもきなく思はずとなう。コレ煩はぬ様に。母御へ孝行。アイ。今迄はよう可愛がつて下さんした。禮は言はずに氣を揉まして。ア、やくたでもない子ぢや。死別れ。サア死別れではなし。縁は切つても朝夕見る顔。サア。誰も見ぬ内。サア去にや。地 コレ去にやいのと突きやられ。名残もをしの離れ得ぬ。衾をわけて出でて行く果ては。桂の川水に浮名を。流すぞはかなけれ。地 蟲が知らすか長右衛門。調ア、どうやら可笑しい今の去にやう。地 合點が行かぬと門の口。落ちた一通灯影にすかし。調晝置の事。扱てこそと。地 駈出しても宵闇に。影さへ見えぬ。フシカ、四つ辻を。

また駈戻つて見る書置。佛壇の間に繁く可愛や可愛やく。突詰めた娘氣り。詰らぬ事で桂川へ心中に出た所。先齋が。看經かんぎょうの聲いつよりも。無常を誘さそで。蕾の花を散らすも。みなこの長右へ岸野が身を投げたを。見るよりふつふ鉢の音。南無阿彌陀くく。詞エ。衛門がなした業わざちやわいの。南無阿彌と死に後れ。人の知らぬを幸ひに其場を。通れ今日迄は生き延びしが。思へばエお前と縁切り外々へ嫁入りする心も陀。南無阿彌陀。さぞや母様の歎き力。最後の一念にて。岸野はお半と生れかなく。殊に只ならぬ此身。世間へ知れ落しと存じゆ間。江戸の兄様を呼び上のぼては私が恥はいとはねども。お前の名し。朝夕の御介抱ごかいほう頼み上げく。コレ。死出の道づれ。ホウ是こそ因果の罪亡を出す悲しく。お絹様への詫言わごころや母くく。そなたが死んでは猶以て。生。桂川へと急ぎ行く哀れを筆に書殘し噂様に呵られぬ内。桂川へ身を投げゆ。きて居られぬ長右衛門一緒に死ぬが親し。さうぢや。さうぢやと観念し。フシエ、お前は御無事で御夫婦中よう。御へ言譯。ア、いかさま因果は車の輪。桂川へと急ぎ行く哀れを筆に書殘し噂折々には一遍の御回向ごくわう願ひく。ア、十五年以前。宮川町の藝子岸野に登の種となりにける。